AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2005.12) 6巻1号:81～83.

第33回日本血管外科学会を終えて

稲葉雅史

学界の動向

第33回日本血管外科学会を終えて

稲　葉　雅　史*

昨年６月23日、24日の両日に旭川グランドホテルを会場に第33回日本血管外科学会総会（会長笹嶋唯博、旭川医科大学第一外科教授）が開催されました。旭川近郊での観光や食に最良のシーズンとしてこの開催時期を選択しましたが、天候には大変気をもみました。しかし、昨年の暑い夏の始まりを象徴するかのような30度近い晴天に恵まれ避暑も視野に入れ本州から来られた方々も拍子抜けした感さえあったようです。本学会は胸部・腹部大動脈、大静脈および四肢末梢動・静脈はもちろん頚動脈や胸・腹部内臓動･静脈などの外科疾患や治療に関する基礎および臨床研究成果を議論する血管外科関連では国内の主要学会の一つであります。したがってその関連専門分野も血管外科のほか胸部外科、消化器外科、移植外科、脳神経外科、放射線科、泌尿器科など幅広い領域に関連しております。また、近年はこれら血管疾患の無侵襲診断法や術中モニター、各種補助手技も急速に進歩しております。上記診療科の医師のみならず当院をはじめ全国から看護師、検査技師、医療工学士など多くの医療関連スタッフの皆様にも参加いただきました。現在血管外科学会の総会員数は約2200名に達しておりますが、本年度は大会関連運営スタッフも含め全国より総勢約1200名の参加をいただきました。

第33回日本血管外科学会の内容

１）学会のメインテーマ

「エビデンスの検証とイノベーション」

２）本テーマ決定の根拠

生活スタイルの欧米化の広まりにより動脈硬化性血管疾患の急増およびその予防の重要性が唱えられて久しいですが、近年の高齢者人口や、糖尿病合併例の増加などにより血管外科の重要性はますます高まっております。欧米では中核となる施設で年間1000例を超える血行再建術が行なわれており、それらの経験から手術適応やその成績について膨大な量のエビデンスが示されてきました。しかし、本邦ではさまざまな施設で高々年間50～100例程度の血行再建術について多寡を競っているのが現状であります。したがって、手術適応や手術手技などに関しては、欧米でのエビデンスの追従もなく各施設の方針に任せられているのが実状でありまた一方で独自のエビデンスも示される環境にもありません。一方、こうした状況の中で近年、動脈瘤やASOに対する血管内治療が広く行われるようになっております。これに加え内視鏡下あるいはロボットによる血管手術も欧米ではすでに一部臨床で実施されておりこれら低侵襲手術の普及も間近にせまっています。さらに、各種血管疾患や病態に対する遺伝子治療や重症虚血肢に対する血管新生療法なども新たな治療薬の開発も視野に入れ積極的に行われております。しかし、これらイノベイティブな治療においてもその適応、実施方法などがさまざまであり、このことは治療効果判定にも影響しております。心臓血管外科専門医制度も立ち上がった今日、本学会でも本邦における各種治療成績を振り返りEBMの確立を目指すことは極めて重要と考えます。また、新しい治療法については現段階での適応・限界を理解しつつその将来性について欧米の専門家の意見もまじえ総合的に判断する機会となることを期待いたしました。

３）今年度の血管外科学会総会の特徴

会長の意向にそって第33回日本血管外科学会総会では従来の本学会の体裁、形式に修正、改良を加えました。

*旭川医科大学　外科学第一講座

- プレナリーセッション、特別講演の時間帯には他のセッションを平行して行わず、会員全員が聴講できるよう配慮する。
- 心臓特に冠動脈外科を専門とする関係者の本会への参加をさらに広める。
- 一般演題は基本的にポスターでの発表とし全演題のプログラム委員による評価からプレナリーセッション発表演題を厳選する。
- またこれと当日の司会者の総合評価からポスターセッションの優秀演題を選出し表彰する。
- インターナショナルセッションをさらに充実し、欧州（オランダ、イギリス、ドイツ、スイス、スウェーデン）、アジア（韓国、マレーシア、香港、タイ）の若手研究者に来日、研究発表の機会を提供するとともに本学会を通じ国際的な学術交流を深める。以上の項目に重点を置く方針としプログラムにも工夫を凝らしました。

4）会長の挨拶

以上の諸点、方針を踏まえた本総会開催にあたっての会長挨拶文（一部）を掲載させていただき本稿を終了いたします。

本学会は会員数や総会参会者の増加など漸く発展の様子が実感できるようになりました。その活力の芽を実りにする総会となるよう努力してまいりました。エビデンスは基礎医学的にも臨床経験的にも証明された明確な真実、なお不確かなもの、あるいは日常診療において継承されてきた一つ一つの医療行為まで様々です。しかし“Is evidence evident?”と危惧されるものが多いのも事実です。今回のテーマは月並ですが、エビデンスを確実にしながら新しいものを開発してゆく自然科学の基本姿勢「エビデンスの検証とイノベーション」と致しました。特別講演は海外から数名の血管外科医にお越し頂きます。ワシントン大学 Sicard 教授は年間2000例以上の血管外科手術を行っている血管外科専門医で、一般外科専門医でもあります。本年の SVS 会長であることから、米国における血管外科の修練についてご講演をお願いしました。Darling 教授は Albany 医科大学で Dr. Shah, Dr. Chang など優れた血管外科医とチームを組み、静脈グラフトによる下肢動脈バイパスでは手術例数、成績とも世界屈指で、すばらしい講演が期待されます。Naylor 先生は Leicester（レスター）大学病院血管外科で、英国では数少ない血管外科教授です。MRSA 人工血管感染について多くの経験を有し、JVS に投稿した私共の論文にも Comment を頂戴したことがあります。重症虚血肢に対し下腿に及ぶ Subintimal PTA を盛んに行い、“下肢末梢動脈バイパスは今年10例しかしていない”といわれるので本会で是非ご講演頂くべくお願い致しました。Jacobs 教授は末梢血管外科を含め血管外科全般で活躍されていますが、特に胸腹部大動脈置換における脊髄虚血防止策について多くの報告をされております。Becquemin 教授は MIVS やロボット大動脈外科について豊富なご経験がある先駆者です。Dr. Money（Ochsner Clinic 血管外科、New Oleans） は腹部大動

写真１　ワシントン大学 Sicard 教授（SVS 会長）米国医学教育に関する特別講演を終えて

写真２　ヨーロッパ、アジアの若手研究者(？)とともに（中央が会長ご夫妻）

脈瘤ステント留置術について、多くの症例を手がけられ、卓越した手技と成績をお持ちです。血管外科の発展に頸動脈手術の増加は不可欠であります。日本脳神経外科学会2003年の調査では頸動脈手術4246例で、ステントは1851例ですが、日本血管外科学会の同年調査では146手術例にすぎません。この現状を踏まえ、Montefiore Medical Centerの大木隆生先生には頸動脈ステントのライブをお願い致しました。ヨーロッパやアジア諸国との交流を深めるため発足した「International Session」は今回第２回を迎え、ヨーロッパ血管外科から５名、アジア諸国は９名のご参加を得ました。さらにDr. Cheng（香港）には「Rutherford Vascular Surgery 4th. ed」にあるように「神経性胸郭出口症候群の診断・治療」、多くの腎移植例を持つDr. Jirasiritham（タイ）には「腎移植患者における血管外科手術と管理」について早朝レクチャーをお願い致しました。

全応募演題数は471題でした。シンポジウム(S)は採択21/応募46で、S-1は代用血管全般の開存率について討論いただきます。シンポジウムに先立って三島好雄先生にご司会の労をお執り頂き、田辺達三先生に代用血管の歴史、材料特性、治癒などの基調講演頂くことと致しました。CABGの演題がなかったことは残念ですが、代用血管について日本の標準が提示されると思われます。S-2はこれも代用血管の主要な合併症である内膜肥厚、S-3は胸部大動脈ステントとし、基調講演はこれらに実績のある江里健輔先生、矢田公教授にそれぞれお願い致しました。S-4は血管疾患の最大死因である虚血性心疾患について取り扱いを議論いただきます。パネルディスカッション(P)は18/35でした。血管新生療法では現在一線でご活躍の著名な先生にご参加頂き、「その治療は本当に有効か？」率直なご討論を頂き、位置付を明確にして頂きます。血行再建再手術と人工血管感染の(P)は指定提示者に実際の経験例をご呈示頂きます。それについて治療戦略をご検討頂きます。Plenary Sessionは一般演題応募の中から３名のプログラム委員の評価点が最も高い話題性のある５題を選定し、その領域の専門家を指定質問者に設定しました。要望演題（44/80）は日常診療で注目すべき題材を選び、一般演題はプレナリーセッション選出以外はすべてポスター発表とさせて頂きました。学会終了後になりますが、要望演題とポスター演題はプログラム委員と司会の評価点を合計して最高点の演題を優秀演題に選定し、記念品と賞状を贈らせて頂きます。

会場は数を少なくし、また会場間の移動を簡単にするためひとつのホテルに収容致しましたため、かなり窮屈です。旭川市は６月が一年を通じて気候、食べ物、景色、スポーツとも最高の季節です。多くの会員の皆様のご来駕をお待ち申し上げます。